



Title	ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題 (20周年記念号)
Author(s)	矢田, 俊隆; Yada, Toshitaka
Citation	スラヴ研究, 20, 49-67
Issue Date	1975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5049
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113011.pdf



ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題

矢 田 俊 隆

は し が き

複合多民族国家ハプスブルク帝国は、内部に多くの矛盾と緊張をはらみながら、ともかくも1918年まで存続した。この国家を全体として統合してきた要因として、普通歴史家は、王朝・官僚制度・軍隊・教会その他をあげているが、とりわけ統一の保持を助けた求心的な力として注目されるのは、軍隊である¹⁾。

この指摘は、ある意味ではたしかに正当である。皇帝の軍隊が、ハプスブルク帝国の最後に近い時期までこの国家の主要な支柱の一つを構成したこと、軍隊はすべての民族がいっしょに服務した場所であり、皇帝の軍司令官に絶対的服従を守ったことは、よく知られている。しかし、はたしてこの軍隊は、帝国の秩序を維持するうえでつねにたよりになる手段であっただろうか。またそれは、とりわけ19世紀中葉以後のナショナリズムの高揚期に、民族問題の影響をこうむることはなかったであろうか。実際、1848-49年の革命の際には、この国の軍隊は二つに分裂して戦いあったし、1867年のアウスグライヒののち、軍隊問題がオーストリアとハンガリーの対立の主要な焦点となったことも、周知の事実である。とすれば、ハプスブルク帝国軍隊の位置づけと評価についてあまりにも楽天的な見解をとることは、警戒に値するといわなくてはならない。本稿の目的は、1815年から1918年に至る時期に、ハプスブルク帝国の軍隊がどのような様相を示したかを、事実を即して考察し、それを通じて、軍隊と民族問題の間にどのような関係があったかを明らかにするにあり、その際特に、アウスグライヒ以後のハンガリーの軍隊問題に、力点がおかれるであろう²⁾。ハプスブルク帝国の民族問題の性格を真によく理解するためには、このような角度からの検討は、不可欠な作業の一つではないであろうか。

1. 19世紀前半のオーストリア軍隊

ヨーロッパ諸国の軍隊の歴史のうえで、ナポレオン戦争が一大転換期にあたっていることは、一般に認められている³⁾。しかしオーストリアの軍隊にかんするかぎり、それはナ

- 1) たとえば、Oscar Jászi, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy*, Chicago 1929, pp. 141-143; Arthur J. May, *The Hapsburg Monarchy, 1867-1914*, Cambridge, Mass. 1951, p. 490 f.; Z. A. B. Zeman, *The Break-up of the Habsburg Empire, 1914-1918*, London 1961, p. 39; Robert A. Kann, *The Habsburg Empire: A Study in Integration and Disintegration*, London 1957, p. 8 f.; Victor-L Tapié, *The Rise and Fall of the Habsburg Monarchy*, London 1971, p. 353.
- 2) 本稿は、次の諸研究に負うところが多い。Péter Hanák, "Hungary in the Austro-Hungarian Monarchy," *Austrian History Yearbook*, Vol. III, pt. 1, 1967; G. E. Rothenberg, "The Habsburg Army," *ibid*; G. E. Rothenberg, *The Military Border in Croatia, 1740-1881*, Chicago 1966.
- 3) たとえば、Alfred Vagts, *A History of Militarism, Civilian and Military*, London 1959. フルフレート=ファークツ著、望田幸男訳「軍国主義の歴史」I, 200ページ以下参照。

ポレオン戦争中も、依然として、本質的には典型的な18世紀風の王朝的組織であった。その士官団は貴族出身で、民族的な意識はなく、もっぱら君主に対する個人的忠誠で結ばれていたし、他方兵士たちは下層階級の出身で、マリア＝テレジアやヨーゼフ2世の時代以来の方式で徴募されていた⁴⁾。この国でも、ナポレオン戦争の間に国民軍をもとめる声がないではなかったが、最高司令部はその考えには冷淡であった⁵⁾。それでもヨハン大公と宰相のシュターディオンは国民軍 Landwehr の計画を立て、実験的にこれを実行したが、限られたものであり、ハンガリーでは試みられなかった。しかもそれは一時的なもので、1808年にはりっぱな戦いぶりをみせたが、シェーンブルンの講和ののちには、活動力を失ってしまった。この組織は紙上ではなお存在し続けたけれども、1809年にそれが不名誉な敗走をみせたあと、シュターディオンの代わってあらたに外相となったメッテルニヒは、民衆の武装という思想に価値を認めず、1913-14年のナポレオンに対する勝利は、正規軍の手でかちえられたものであった。

ナポレオンの没落後1848年の革命に至る時期には、オーストリアの軍事政策は、何よりもまず、1815年の諸条約によって打ち立てられた現状の維持と国内の安全確保に向けられた⁶⁾。慢性的な財源不足に悩まされて、軍隊の定員は思いきって削減されたが、その性格と構成はほとんど変わらなかった⁷⁾。軍隊は、すぐれて貴族的な士官団と政治的感覚の鈍い長期サービスの兵士から成っていたから、そこからは民族問題をしめ出すことができたし、瓦解におちいらずに戦線を守ることも可能であった。しかしそれにしても、長期サービスの期間は修正されなければならなかった。古くから募兵が行なわれていた諸州、すなわち、ティロール、ロンバルディア＝ヴェネツィア、ハンガリーを除くハプスブルク王国の全領土では、1827年に、サービスは14年と定められた。なお、ティロールとロンバルディア＝ヴェネツィアでは、新兵は8年間、ハンガリーでは各徴募兵は生涯サービスすることになっていたが、1840年に、ハンガリーのサービス期間は10年に短縮された。さらに1845年には、サービス期間は、帝国内の全地域で画一的に8年と定められたが、下士卒は依然下層階級のものと決まっていたし、一般兵士の生活は相変わらずきびしいものであったから、脱走もおこりやすかった。それでも、厳重な監督と厳格な訓練によって、軍隊を時代の政治的風潮から隔離しておくことは、可能であると考えられていた⁸⁾。

しかし、ナショナリズムの精神を軍隊組織から完全に追放することは、不可能であった。特にハンガリーでは、それ自身の国民的軍隊をもとめる運動がひたぱんにおこった。はやくも1790年に、ハンガリーの地方議会はマジヤール人士官に指揮される国民的部隊

4) Jürg Zimmermann, *Militärverwaltung und Heeresaufbringung in Österreich bis 1806*, Frankfurt a. M. 1965, S. 108-114.

5) *op. cit.*, S. 121-126.

6) 当時のオーストリアの外交政策については、拙稿「ハプスブルク帝国とメッテルニヒ」岩波講座『世界歴史』18参照。

7) 19世紀前半のオーストリア軍隊の劣弱ぶりについては、G. E. Rothenberg, "The Austrian Army in the Age of Metternich," *Journal of Modern History*, Vol. 40, No. 2, 1968; 広実源太郎「オーストリア軍とクロアチアの Militärgrenze」評林 XIV, 1975. 3 参照。

8) 士官団の構成については、Nikolaus von Prenadovich, *Die Führungsschichten in Österreich und Preussen (1804-1918) mit einem Ausblick zum Jahre 1945*, Wiesbaden 1955, S. 43 f. 参照。

の設置を要求しており、この思想は、ハンガリーのジャコバン派のプログラムでも、ある種の役割を果たしていた⁹⁾。1808年にも議会はこの要求を繰り返し、ハンガリーの新兵はもっぱら国民的な単位でハンガリー人士官のもとに服務することが望ましいと主張した。同様の要求は、1832-36年の会期中にも、また1840年にも行なわれている¹⁰⁾。このように、マジャール人の民族的要望は最もはっきりしたものであったが、民族問題は、他の軍団のなかにも姿を現わしはじめた。ベーメンで募兵された連隊では、ドイツ人とチェコ人の間に摩擦がみられたし、また最高司令部は、イタリア人部隊が不満をもつことを知っており、ポーランド人の忠誠についても疑念を持っていた¹¹⁾。伝統的に皇帝に忠誠であった軍事的国境地域の南スラヴ人守備兵の間にも、反抗的な態度がみられるようになった。もっとも、オーストリアの最高軍事機関であった宮廷戦争会議 Hofkriegsrat は、ハンガリーのマジャール人と南スラヴ人の対立関係を念頭において、ハンガリーで騒ぎがおこった場合には、南スラヴ人の守備兵は躊躇なく彼らの義務を果たすであろうと、なお確信していた¹²⁾。

民族主義の影響に対処するために、ウィーン政府は、軍隊を地方的不満にわずらわされない地域、すなわち出身地以外の地区に配置する政策をとった。その結果、1847年末には、ツィスライタニエン Zisleithanien（ライタ川のこちら側、帝国の西半部、二重帝国時代のオーストリア部）の35のドイツ人歩兵連隊のうち、6つはイタリアに、4つはハンガリーに配置され、他方15のハンガリー人連隊のうち、6つはイタリアに、4つはハンガリーに、残りは下・上オーストリアとベーメンに置かれた。ツィスライタニエンの25の騎兵連隊のうち、13はハンガリーに駐屯したが、他方13のハンガリー人騎兵連隊のう

9) Denis Silagi, *Jakobiner in der Habsburger-Monarchie*, Wien 1962 参照。

10) Julius Miskolczy, *Ungarn in der Habsburger-Monarchie*, Wien 1959, S. 48 f., 81 f.

11) Rudolf Kiszling, "Das Nationalitätenproblem in Habsburgs Wehrmacht 1848-1919," *Der Donauraum*, 1959, S. 82 f.

12) Rothenberg, *The Military Border in Croatia, 1740-1881*, pp. 140-142. ここで、軍事的国境地帯の輪廓をみておこう。軍事的国境地帯 *Militärgrenze, military frontier, military border* は、ハンガリーの南縁に沿って走っており、クロアチアのものが最も古く、1522年に設けられた。その後18世紀につくられたものも多く、19世紀の中葉に及んでいる。元来はトルコ人の前進に対する常設の堡壘として、また疫病に対する防疫線として設けられたもので、開拓しつつ防衛を行なう一種の屯田兵制度といえる。すべての村には衛兵所があり、兵士は同時に農民であり、国境軍はダルマティア、ボスニア、セルビア、ルーマニアのトルコ国境にそって、連隊区を単位に展開・配置された。この地域は地方自治を許されていたが、ウィーンの陸軍大臣に統治され、長い間、この地域からの兵士は、ハプスブルク軍隊のバックボーンであった。しかしまた国境軍は、同時にハンガリーの制御しにくい貴族を抑えるための王朝的道具という意味をもち、18世紀の中ごろになってトルコの危険がすぎ去ると、この意味の方が強くなった。ハンガリーの有力な貴族は、国境軍を王朝的統制の表現とみてこれに憤慨し、たえず国境軍制度の脅威となったが、逆に国境軍はハプスブルク家を、ハンガリーの身分制議会や貴族の圧力から、彼らの特権的地位を保障してくれるものとみて、つねに王朝に忠誠であり、ハプスブルク家の絶対主義に寄与するとともに、19世紀になると、さらに民族主義や自由主義運動と戦うための人的資源を供給した。しかし1867年のアウスグライヒののち、ハンガリー人は軍事的国境地帯の廃止と、その地域を自国の文官行政のもとに統合することを要求した。皇帝はこれに従って一連の勅令でこの制度を解消し、1868年この地方はハンガリーの行政に譲渡されたが、この措置は当然またこの地域の不満を生むことになった。広実源太郎、前掲論文および Rothenberg, *The Anstrian Military Border in Croatia, 1522-1747*, Urbana 1960, pp. 124-127 参照。

ち、ハンガリー国内にとどまったのは、わずか6つにすぎなかった¹³⁾。

軍隊を君主に忠実な地域に配置するこの政策は、1848年革命の波が帝国全土を洗ったとき、真価を発揮した。ハンガリーにあったイタリア人部隊も、イタリアにあったハンガリー部隊も、相変わらず皇帝に忠実であった。これに反して、ハンガリーにあったマジャール人部隊は、軍事的国境地方のセクラー Szekler ¹⁴⁾を含めて、反乱に荷担している。一方ドイツ人の部隊では、ただ一つウィーンのリヒター Richter 歩兵大隊が革命側に投じただけであった。この時期には約70,000人の兵士が離反したけれども、軍隊の大部分は依然王朝にとってたのみになった。ハンガリーの反乱を最終的に鎮圧したのが、ロシア軍の助けをえたとはいえ、ハプスブルク家の軍隊であったことは、明らかにこのことを物語っている。

2. 1848年革命後普墺戦争まで

1848-49年の革命は、ハプスブルク帝国の軍隊にどのような影響を与えたであろうか。たしかに、皇帝（オーストリア）の軍隊が国王（ハンガリー）の軍隊と戦うといった光景、また、ハンガリーの反乱軍が示した予想もされなかったほどの軍事力は、軍隊の指導部を動揺させた。「もう一度1848-49年のような事態がおこったら、われわれは生きのびられないであろう¹⁵⁾」というアルブレヒト Albrecht 大公の言葉は、これを示すものである。それにもかかわらず、その後20年間、軍隊ではなんら根本的な改革は行なわれなかった。「1848年ののち、高官の間には、知識や技術の習得を軽視するばかりか、それに不信をいだく傾向さえあった¹⁶⁾」と、クレイグ教授は述べている。バッハの新絶対主義政権は、政治や行政の領域で新しい体制をつくり出そうとつとめたが、軍部は、大体において革命前の状態に復帰しようとした。その際、懲罰的な処置がとられたことは、いうまでもない。ハンガリーの革命軍に加わった若干の上級士官は処刑され、そのほか免職されたり投獄されたりしたものも、かなりの数にのぼった。また軍事的国境地域のセクラー連隊は解散され、その兵士たちは各地の軍隊にばらまかれた。しかしながら、それほど深くかわらなかつた士官の多くは、恩赦をうけ¹⁷⁾、また、兵籍にある隊員をもう一度吸収するために、特別の努力がはらわれ、その結果若干の連隊、特に軽騎兵連隊は、完全に再建されたのである。さらに、以前の宮廷戦争会議に代わった新しい陸軍省は、次のような勧告を行なっている。「すべての士官は次のことを記憶しなければならない。皇帝陛下によって与えら

13) Rothenberg, Habsburg Army, p. 72.

14) 文字の上では辺境開拓者 frontierman の意味で、東部トランシルヴァニアのマジャール人を指す。常置の守備隊として東方に送られた中世マジャール人移住民の子孫といわれるが、人種的には、マジャール語を採用していた蒙古系のアヴァール族であったという説もある。May, op. cit., p. 510; Kann, op. cit., p. 213 参照。

15) アルブレヒト大公が、1862年11月5日に、高級副官 Crenneville 伯に述べた言葉。Heinrich von Srbik, Aus Österreichs Vergangenheit, Salzburg 1949, S. 139; Rothenberg, op. cit., p. 72.

16) Gordon A. Craig, "Command and Staff problems in the Austrian Army, 1740-1866" in Michael Howard (ed.), The Theory and Practice of War, New York 1965, p. 54.

17) しかし、ハンガリーの士官たちがその後長い間疑惑の目でみられるようになったことは、否定できない。それが、のちの二重帝国時代にも尾を引くことは、のちにみるとおりである。

れる大赦は、最近の過去が忘れられる場合にのみ有効になりうるということ。敗者についてのいっさいの侮辱や誹謗をさけるために、特別の配慮がなされなくてはならない。…そして、これらの軍隊をもう一度完全に懐柔し統合するために、あらゆる努力を払うべきである」¹⁸⁾。

これは当をえた考え方であったが、実際には、無神経なバッハ政権の施策が若干の連隊の処分に悪影響を及ぼした結果、くじかれてしまった。たとえば、革命の際反乱軍に加わったハンガリー士官のあるものは、懲罰として、さまざまな連隊で普通の兵士として登録されたために、彼らは、特に移り気な構成分子になっていった¹⁹⁾。さらにまた、バッハ政権は、革命の際王朝に忠誠を示した南スラヴ人を、敗者であるマジャール人同様きびしく取扱ったために、クロアチア＝スラヴォニアとヴォイヴォディナで反対をひきおこし、その結果、クリミア戦争中ドナウ諸州を占領している間に、南スラヴ人の士気はあがらず、当局に重大な懸念をよびおこしさえしたのであった²⁰⁾。

その後まもなく、1859年にはイタリア統一戦争、1866年には普墺戦争がおこったが、これらの戦争は、次第に高まってきたナショナリズムの精神が軍隊の間にもくいこんで、その士気に大きな影響を及ぼしていたことを暴露した点で、重要である。いずれの場合にも、オーストリアはその全武装兵力を戦場に投入することができなかったが、それは、万一の反乱に備えて、かなりの兵力を背後地、特にハンガリーとクロアチアにとどめておく必要があったからである²¹⁾。さらにまたオーストリアの軍隊は、これら二つの戦争を、まったく時代おくれになった用兵原理で戦った。これは、オーストリア軍の旧式な劣弱ぶり

18) 1849年9月13日の布告。Rothenberg, op. cit., p. 73.

19) Rothenberg, op. cit., p. 74.

20) Rothenberg, *The Military Border in Croatia*, p. 160. クロアチア人は1848年の革命の際にフランツ＝ヨーゼフ皇帝の王座を救ったけれども、その後の絶対主義時代の間は、なんら特別な報酬を受けなかった。マジャール人のある貴族が、彼の友人であるクロアチア人に、「われわれが罰として受けたものを、君たちは報酬として得た」と告げたのは、正当であった。Peter F. Sugar, "The Nature of the Non-germanic Societies under Habsburg Rule," *Slavic Review*, 1963, p. 21. なおここで、セルビア人とハプスブルク家の関係をまとめてみておこう。ハプスブルク領内のセルビア人の最も重要な居住地は、ハンガリー南部のヴォイヴォディナとクロアチア＝スラヴォニアであった。セルビア人は、1690年に南部ハンガリーへ集団的に移住して以来、引続き王朝に忠誠であった。ヴォイヴォディナのセルビア人は、レオポルト1世(1705-11)の特許状によって保護され、時折りはウィーンで大臣の地位を得た。カルロヴィッツ Karlowitz とノヴィ＝サド Novi Sad の町は文化の中心で、ヴォイヴォディナのセルビア人はかなり高度の教育と政治的知識を手に入れ、経済的にも発展して、1820年ごろまでに、すぐれた知識階級、商人、富裕な自由農民の共同生活体をつくっていた。しかし彼らはたえず、マジャール人の地方議会の攻撃をうけた。クロアチア＝スラヴォニアでは、クロアチア人が同様の役割を演じた。そこで、ヴォイヴォディナとクロアチアのセルビア人は共に、皇帝への忠誠のモデルになったのである。1848年に、親ハプスブルク、反マジャールの立場をとることによって若干の利益を得た唯一の民族は、セルビア人であり、彼らはヴォイヴォディナで自治を認められた。しかし1850年代の終わりに、彼らの権利はもう一度奪い取られた。そして1867年、彼らの土地が完全にハンガリーに併合されたとき、皇帝とセルビア人との協定のチャンスは消失し、その時以後、彼らの間では、独立国セルビアの魅力が着実に成長していった。マジャール人とクロアチア人の支配に引き渡されたとき、彼らはただセルビア人の国家の救助をあこにすることしかできなかったのである。Sugar, op. cit., p. 23 f.

21) Heinrich Friedjung, *Der Kampf um die Vorherrschaft in Deutschland 1859 bis 1866*, Stuttgart 1916, Bd. I, S. 31.

を示すものであるが、多くの批評家は、少なくともそのいくらかを、最高司令部・連隊の将校・兵隊の三者間に存在した相互不信によるものであった、としている²²⁾。実際 1859 年には、軍隊の戦闘活動に大きなむらがあり、ハンガリー人やクロアチア人の亡命者による民族主義的宣伝も、非常な効果をあげていた。たとえば、ソルフェリノの戦いの間に、二つのハンガリー連隊——第 19 および第 34 連隊——は、ほとんど一団となって脱走した。また、クラム-ガラス Clam-Gallas 伯配下の主としてハンガリー人から成る軍団は、戦場から引きあげられなくてはならなかったし、ベテランの国境守備兵さえも、はなはだ士気があがらなかった²³⁾。当時、オーストリアのある自由主義的士官は、「抑圧された民族や階級からは、非常に熱心な兵士は生まれない」と述べている²⁴⁾。

1866 年の戦争の際にも、オーストリアの軍隊は民族問題に悩まされた。プロイセンとイタリアはこの時にもハプスブルク帝国内の民族的不満につけこむ計画を立て、広範な南スラヴ人の反乱、ベーメンの暴動、ハンガリーの反乱などが立案された。南ドイツでの会戦中に、イタリア人の二つの連隊は、事態が重大化したときプロイセン軍に投降したし、ハンガリー人の戦争捕虜は、クラブカ Klapka 軍団に組織された。これは効果的なものではなかったが、50 年後第一次大戦中につくられる捕虜軍団の原型をなすものとして、注目される²⁵⁾。

3. アウスグライヒと軍隊の問題

1866 年の経験は、不可避的にいくつかの教訓と帰結をもたらした。短期の一般兵役にもとづく大衆軍隊の必要が明白になったことと、ハンガリー問題に何らかの解決をみいだすことの差し迫った必要とが、主なものであり、その結果、ハプスブルク帝国の軍隊の歴史には、一つの新しい時期が開かれることになった。短期の一般兵役は、はやくも 1866 年 12 月の勅令で導入されたが、この処置は、ハンガリーではげしい反響をよびおこした。ジュラ=アンドラーシ Gyula Andrassy はそれを、「ハンガリーの民族的権利のはなはだしい侵害」とよび、軍隊の再編制は憲法上の協議にもとづいて行なわるべきであり、勅令によって行なわるべきではないと、強く主張した²⁶⁾。こうして、将来の軍隊組織の問題、特にハンガリー軍隊の地位の問題は、アウスグライヒの交渉の一部となったのであるが、しかし、この問題が非常に刺激的なものであることは、ただちに明らかになった。ハンガリーはもとより独立の軍隊を希望したが、ウィーン政府はなおこの点で譲歩することを拒否した。しかし、さしあたって両者はともに、彼らを対立させていた政治上の主要な諸問題の解決を強く望んだために、軍隊問題はとぼされる形になり、その結果 1867 年のアウスグライヒは、将来の軍隊組織や軍隊の指揮構造を詳細に規定するには至らなかった。

軍隊をめぐる交渉は、一年近く続いた。陸軍監督総監のアルブレヒト大公は、単一軍隊

22) Craig, op. cit., p. 62; Rothenberg, Habsburg Army, p. 74 参照。

23) Friedjung, op. cit., S. 31 f; Rothenberg, The Military Border in Croatia, pp. 161-163; Rothenberg, Habsburg Army, p. 74. 参照。

24) Rothenberg, Military Border in Croatia, pp. 161-163.

25) op. cit., p. 166 f.

26) Eduard von Wertheimer, Graf Julius Andrassy: sein Leben und seine Zeit, Stuttgart 1913, Bd. I, S. 250; Rothenberg, op. cit., p. 75.

の保持を望む王朝的＝中央集権主義的グループの代弁者であったが、彼は、ある通俗的なパンフレットのなかで、次のように述べている。オーストリアの人々は王朝に対してまことに献身的であり、「諸政党の策謀にもかかわらず、また反逆者の美化が行なわれているにもかかわらず、」伝統的な単一の軍隊精神 *Armeegeist* をたいせつにし、分立主義的な連隊精神 *Regimentsgeist* を拒否している、と²⁷⁾。こうして、アルブレヒト大公とハンガリーの民族主義者たちの間には、ほとんど合意の余地がないようにみえた。しかし、フランツ＝ヨーゼフ皇帝もアンドラーシも、なんらかの妥協点をみいださなくてはならないと確信していた。そして最後に、帝国軍事裁判所長官フリードリヒ＝ベック＝ルジコフスキー *Friedrich Beck-Rzikowsky* 陸軍大佐によって、次のような解決策が提示された。それは、共同の「皇帝と国王の (k. k.)」軍隊を存続させるとともに、王国の両半部ハンガリーとオーストリアにそれぞれ別個の二つの部隊——*Honvéd* と *Landwehr*——をつくることを、示唆したものであった。この解決案は、アンドラーシの努力でハンガリー議会を通過し²⁸⁾、また皇帝によって、気の進まぬ軍隊の最高司令部に押しつけられた。1868年12月5日、オーストリアとハンガリーの代理委員会 *Delegation* は新しい軍隊組織を承認し、翌年はじめには、必要な補足的法律が可決された。その結果、二重帝国の男子国民はすべて、全長12年の兵役義務を負うことになり、共同軍隊のために選ばれた新兵は、3年ないし4年間服務したあと、予備役に編入されることになった。同時に、年々入隊する新兵の一部は直接 *Honvéd* ないし *Landwehr* にはいり、現役で2年間、予備役で10年間服務することになった。

1868年のこのような軍隊問題の解決は、最初からけっして完全に満足なものではなかった。ハンガリーの歴史家ミスコルツィは、それを「アウスグライヒの最大の責任」とよんでいるほどである²⁹⁾。たしかにそれは、ハンガリー人の最大限の要求に添ってはいなかった。*Honvéd* は国王＝皇帝を最高司令官として認め、訓練・組織・装備などの点では、共同軍隊を手本にしていた。さらに、共同陸軍大臣フランツ＝クーン *Franz Kuhn* 男の主張にもとづいて、*Honvéd* は自己の砲兵部隊をもつことを拒否された³⁰⁾。しかしまたその反面、*Honvéd* は少なくともある程度、マジャール人の民族的念願を実現したものであった。それは、ブダペシュトにあるそれ自身の省に所属し、単なる予備軍ではなく、大体において国民的軍隊といってもよいものであった。そこでは、クロアティア＝スラヴォニアの部隊を除いて、マジャール語が指揮語として使われ、民族独自の襟章その他の記章がつけられた。また、*Honvéd* の士官団は、共同軍隊からの選択にもとづく移動という形で、もしくは、1849年の革命軍のかつての士官を再雇用するという形で選ばれたが、これらの士官団は、はっきりした民族主義的気質を備えていた。さらに、ブダペシュトの議会は、一般に共同軍隊のための財源の承認には乗り気でなかったが、*Honvéd* のためにはどのような出費も惜しまなかった。そのためこの組織は、オーストリアの *Landwehr* よりもは

27) このパンフレットは、*Wie soll Österreichs Heer organisiert sein?* と題されている。Rothenberg, op. cit., p. 76.

28) Wertheimer, op. cit., S. 363-367.

29) Miskolczy, op. cit., S. 162.

30) Srbik, op. cit., S. 183 f.

るかに大きな重要性をもつようになった³¹⁾。

しかしそれにもかかわらず、このような事態の発展は何人をも喜ばせなかった。ハンガリー人は、Honvédの自主性をますます増大させるための努力を続けたし、他方ウィーンでは、こうした事態の進展は、重大な不安の目をもってながめられた。とはいえ、この決定は、幾多の欠陥を含みながらも、その時点で到達されえた唯一可能の解決だったのであって、それは、二重王国内のハンガリー軍隊の地位にかんする論争を終わらせはしなかったが、その後25年間この論争を表面化させなかった点で、注目に値する。

4. 二重帝国前半期の軍隊とナショナリズム

ところで、新しい軍隊の構成と一般兵役の導入は、どのような影響を及ぼしたのであるうか。それはまず南スラヴ人の攻撃をこうむることになり、兵役義務の強制は、1869年に、また1881年に、南部ダルマチアで血なまぐさい暴動をひきおこした。同じころ、ハンガリーがクロアチア＝スラヴォニアの軍事的国境地域を解消して自国の行政に組みこもうとする動きをみせると、それがまた不穏と衝突を生み、1871年のラコヴィカ Rakovicaの反乱で頂点に達した³²⁾。南スラヴ人の忠誠にかんする疑念から、1870年には、プロイセンと戦う場合には彼らを動員しないという決定が下されているし、同じ考慮は、1878年のボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領にみちびく審議の過程でも、一つの重要な要因をなしていた³³⁾。こうした南スラヴ人の不穏は、マジャール人に認められた特恵的地位に対する二重帝国内スラヴ系諸民族の一般的な反対の一部をなすものであったことは、いうまでもない。ただ、軍隊にかんするかぎり、南スラヴ人の状態は、1890年代には少なくとも一時安定したものになっていた。

しかしこの時までには、デモクラシーの拡大と一般的な教育水準の向上に伴って、共同軍隊の存在を正当化する基本原理への挑戦がはじまっていた。われわれはそれを、1868年以後おこった、共同軍隊の構成と性格の変化のうちに見ることができる。新しい武器システムと新戦術が導入された結果、以前よりもはるかに多くの専門的知識が必要になり、才能次第で出世できる道が開かれるにつれて、士官団における貴族の優位は傾きはじめて³⁴⁾。それとともに、軍隊の民族的構成にも変化がおこっていた。この点については、従来多かった、ドイツ帝国からの、特に南西ドイツの貴族出身の士官の流入が、完全にやんだとは言いぬまでも、著しく低下したことを、無視するわけにはゆかない。しかしそれにも増して重要なのは、予備士官の登場と、それに伴う軍隊のメンタリティの変化である。

当時、帝国軍隊の専門的士官団は、なおすぐれて「ドイツ人的」な性格を保持していたが、ドイツ語の使用は、必ずしも民族意識の高揚やドイツ民族への献身を意味したわけではなく、むしろ王朝への忠誠と、サービスの必要条件と、ドイツ語の使用とが都合よく重なっていたにすぎず、それはまた、彼ら自身の利害が王朝および帝国の運命とかたく結びついていることを示すものでもあった。ところが、一般兵役の導入後は、予備士官の勤務が必

31) Rothenberg, op. cit., p. 77.

32) ibid.

33) Rothenberg., The Military Border in Croatia, p. 176; Srbik, op. cit., S. 91.

34) Preradovich, op. cit., S. 43-45; Jászi, op. cit., p. 142 f.

要になり、その数は次第に増大していったが、彼らはもはや、専門的士官団の強い正統主義的感情を共有してはいなかった。「一年志願兵」から補充された予備士官は、最初は主にドイツ人であったが、高等教育の水準が高まってすべての民族の代表に門戸が開かれてゆくにつれて、連隊の予備士官たちは、諸部隊の民族的構成を反映するようになった。普通彼らは、軍隊精神を発展させたり閉鎖的な職業軍人のサークルにはいたりする時間もなければ、その気もなかった。さらにドイツの場合と違って、二重帝国では、予備士官に任命されることは、ほとんどなんの社会的威信も伴わなかった。そのため予備士官たちは、彼らの出身地および出身階級の民族的・社会的な考え方に強く引かれる傾向をもっていたのである³⁵⁾。

一般の兵士についても、同様のことがいえる。古参の下士官を除いて、兵士はもはや、長期サービスの専門的軍隊がかつて示したような疑う余地のない忠順を、示しはしなかった。王国内の民族闘争が敵意にみちた性格を強めてゆくにつれて、それは、共同軍隊のドイツ人兵士たちをも浸食しはじめた。「ナショナルイズムは王朝的愛国心よりも重要なものだ」というゲオルグ＝フォン＝シェーネラー Georg von Schönerer の言葉は、軍隊の君主に対する忠誠の誓いとは一致しえないものであった³⁶⁾。この言葉に示されるはげしい民族的対立は、専門的士官団のうちにも反映していた。このころビスマルクは、ベーメンの民族闘争でドイツ人とチェコ人との憎しみが激化しているのを見て、「いくつかの連隊では、両民族の士官たちはたがいに遠ざかって、会食もしたがるほどになっている」と述べている³⁷⁾。その後数年たった1895年に、カジミール＝バデニー Kasimir Badenier 伯は、王国の民族問題全体の状況を論評して、「多民族国家は、それ自身に対する危険なしに戦争を行なうことはできない」と語っている³⁸⁾。このバデニーの見解は、いささか悲観的にすぎるかもしれない。とはいえ、第一次大戦に先立つ20年間に、ハプスブルク帝国の軍隊が徐々に、しかし確実に解体の過程をたどったことは、多くの観察者が口をそろえて承認しているところである³⁹⁾。

5. ハンガリーの軍隊問題の特質

アウスグライヒの成立当初、ハンガリーでは Honvéd の地位と構成について若干の論争が行なわれたが、その後20年余は比較的平穏であった。しかし、1889年以後、軍隊問題はふたたび重大な政治的争点となって登場し、皇帝とハンガリー民族主義者の間にはげしい衝突がおこり、それとの関連で、1889、1903、1905年に、ハンガリーは深刻な政治的危機に見舞われた。本章では、ハンガリーの軍隊論争をまとめて考察し、論点を整理することによって、問題の所在と性格を明らかにしたいと思う。

ハナーク教授は、軍隊問題はハンガリーにおいて二重主義体制のアキレスのかかととな

35) Ludwig Jedlicka, *Ein Heer im Schatten der Parteien*, Graz 1955, S. 5 f.; Rothenberg, *Habsburg Army*, p. 78 f. もとより大きなミドルクラスをもつ民族集団だけが相当数の予備士官を供給しえたのであって、ドイツ人、マジャール人、チェコ人が優勢であった。

36) Oskar Regele, *Feldmarschall Conrad*, Wien 1955, S. 83-85.

37) Rothenberg, *Habsburg Army*, p. 79.

38) May, *op. cit.*, p. 491.

39) ファークツ, 前掲書 II, 215 ページ。

った、と述べているが⁴⁰⁾、これは適切な表現である。すでにみたように、軍隊は二重主義の産物ではなく、古いタイプの絶対主義の、あるいはむしろ新絶対主義の遺物であった。共通陸軍大臣の国制上の地位は、1867年のアウスグライヒ法でははっきりしていず、法律の規定したところでは、統一的指導権、最高指揮権、および軍隊の内部組織にかんするいっさいの事柄は、皇帝の直接支配下にあった。ハンガリー議会の権限は、軍隊の新兵数について採決し、軍務の期間を決定し、軍隊に食物と収容施設をどのように供給するかについて審議する権利に限られていた。従来ハプスブルク家は、自己のもつ軍隊の最高指揮官としての絶対的な権限を、あらゆる侵害から守ってきたが、「立憲的」皇帝フランツ＝ヨーゼフも、この点ではなんら例外ではなかった。それゆえ、軍隊問題における政策決定のパターンは、きわめて簡単明瞭であった。オーストリアとハンガリーの議会は、軍隊の有効総人員と費用にかんするいっさいの事項を採決する権利を与えられてはいたが、本質的な決定はすべて、君主および軍隊の指導者たちの手で行なわれたのである⁴¹⁾。要するにハンガリーでは、軍隊問題にかんするかぎり、二重主義の原則は有効に実行されなかったといつてよい。

それゆえ、ハンガリー人と帝国軍隊との関係が調和的なものでなかったことは、当然である。制度的な問題から事実上の問題に目を移せば、まず注目されるのは、共同軍隊の参謀本部においてハンガリー人の数がきわめて少なかったことである。それは、1867年にはわずか4%にすぎず、19世紀の終わりころにも、4.5%に達したにすぎなかった。その時点で、参謀将校の60%はドイツ人であり、18%はスラヴ人であった⁴²⁾。将軍や佐官級士官の大多数は民族的気質の持主ではなく、親王朝的気質の持主であったから、このような民族性による参謀将校の分布は決定的な意味をもつものではなかったが、それにしても、帝国軍隊のトップクラスの士官のうちマジャール人が比較的少数にすぎなかったことは、ハンガリーにとって愉快なことではなかった。

親王朝的気質のドイツ人による指導権と指揮権、訓練の体系⁴³⁾、皇帝と国王の軍隊の伝統全体が⁴⁴⁾、「ハンガリー国家の観念」「一体としてのハンガリー政治国民」といった基本原則とは、まったく相容れぬものであった⁴⁵⁾。帝国軍隊はもろもろの種族 *Volksstämme* を認めたにすぎず、したがってマジャール人は、ここでは支配的民族の一つとはみなされなかった。同時に、「神聖なハンガリー王冠の土地」に住む諸民族も、「ハンガリー国民」とはみなされず、ハプスブルク帝国の臣民とみなされたにすぎなかったのである⁴⁶⁾。

40) Hanák, *Hungary in the Monarchy*, p. 298.

41) Hanák, *op. cit.*, p. 295.

42) Hanák, "Probleme der Krise des Dualismus" in *Studien zur Geschichte Österreichisch-Ungarischer Monarchie*, S. 352.

43) ハンガリーの新兵たちは、彼らの民族意識を強めるような訓練をうけるかわりに、ハンガリー王国よりもずっと広い地域のためにはたらくことを学ばねばならなかった。いいかえれば、大オーストリアが軍隊のなかに、また軍隊を通じて、生き残っていたのである。Tapié, *op. cit.* p. 342.

44) 皇帝も共同軍隊を、彼の二重帝国の力の基礎とみなし、自分をすべての人民に無差別に親密に結びつけるとともに、他面彼の人民を彼自身の人格に結びつける制度であると考えた。それゆえ、軍隊をいじろうとするハンガリー民族主義者の要求は、皇帝のなかにはげしい、そして高まるいらだちを引きおこしたのである。Macartney, *op. cit.*, p. 696.

45) Hanák, *op. cit.*, S. 345 f.

46) István Dolmányos, *A magyar parlamenti ellenzék történetéből, 1901-1904*, Budapest 1963, pp. 161-163.

それゆえ、皇帝と国王という二重の資格でフランツ＝ヨーゼフが支配権をにぎる共同軍隊は、ハンガリー人にとっては、自国の諸制度よりも優位に立ち、自分たちが十分制御しえない外的な何物かであったが⁴⁷⁾、このような軍隊がつねにハンガリー国内に存在し、そこで独立の権威ないし権力として機能したことは、大きな問題であった。

しかも、共同軍隊の長官たち——特にアルブレヒト大公——は、1848年のハンガリーの「反乱」の記憶を相変わらず強くもち、アウスグライヒにはつよい不満を抱いていたので、そのためにも軍隊の間に超民族的的精神を養おうとつとめ、ハンガリーの分立主義の表現をたえず抑制した。ハンガリー国内に駐屯した軍隊の態度もかなり刺激的で、士官も下士官兵もしばしば自分たちが占領軍でもあるかのように行動した。士官団は、ハンガリー人の伝統や民族的な誇りを傷つけることも多く、ハンガリーの旗が士官たちのカジノから投げ出され、また、1848年の独立戦争を想起させるものはすべて嘲笑の種になったが、他方、イエラチッチ、ヴィンディシュグレーツ、ヘンツィ⁴⁸⁾らの思い出はたいせつにされ、彼らに敬意を表する儀式が行なわれた。

したがって、アウスグライヒ後の比較的平穏な20年間にも、いくつかの挑発的な事件がおこり、ハンガリーに深刻な憤激の感情をあふり立てていたのである⁴⁹⁾。しかも、ハンガリーの政府も議会も地方の官憲も、法律が彼らに権利を与えている場合にも、軍隊に反対して何かを行なうことはできなかった。クロアチア人の連隊がイエラチッチのために万歳を唱え、フィウメでハンガリーに反対するデモが行なわれた際にも、ハンガリー政府はこうした気ままな行動に謝罪や賠償をもとめることはできなかったし、このクロアチア連隊を移動させることもできなかった。また政府は、挑発的にヘンツィ將軍の墓前に花輪をおいたという理由で、ある士官を解雇することさえできなかった⁵⁰⁾。こうして、士官団と住民の間にはしばしば衝突がおこり、軍隊は、ハンガリー人にとって、たえざるいらだちの源泉であった。要するに共同軍隊は、ハンガリー人からみれば、歴史的過去にかんする不満と二重主義時代の不完全な主権との生きたシンボルというべきものであった。

そこで次に、軍隊問題に対するハンガリーの政治的対応をみなければならぬ。アウスグライヒの推進者ないし支持者たち——デアーク Deák やアンドラーシュ、自由党のティサ Tisza 内閣など——は、オーストリアとの結合によってハンガリーが軍事的防衛や経済的発展の点で幾多の重要な利益を得ていると確信していたから、軍隊問題でも所与の状況をやむをえぬものと観念していたが、いっそう若い世代の急進的民族主義者たちは、さらに前進することを望み、またそれが可能であると主張しはじめた。彼らは、ハンガリー王国内に共同軍隊の駐屯兵が存在することを不名誉と考え、Honvéd を単なる一つの譲歩にすぎないと解釈し、すべてのハンガリー部隊を統合する完全に独立したハンガリー軍隊とい

47) Tapié, op. cit., p. 341.

48) Hentzi は、1949年にハンガリー軍に対抗して王国のためにブダを守り、ハンガリー人が守っていなかったペシュトをも砲撃して、ハンガリー人の間に憎悪をかき立てた將軍である。

49) しかし他方またハンガリーでも、独立戦争およびその犠牲者についての民族主義的な祝典が催されて、それが共同軍隊の専門的士官団を大いに腹立たせたことも、事実である。Rosenberg, op. cit., 80.

50) Hanák, Hungary in the Morarchy, p. 297.

う究極目標を達成しようと努力した。

しかし彼らが政治的にとりうる方策は、二つに限られていた。1868年に結ばれた協定のもとでは、ブダペストの政府と議会は、共同軍隊内部の事柄にはほとんど直接の影響を及ぼしえなかったけれども、彼らは、アウスグライヒの定期的な10年ごとの再交渉の際に、彼らの諸要求を主張し、討議に強力な影響を及ぼすことは可能であった。次に、ハンガリー人が目的達成のために使いえた唯一の武器は、帝国軍隊の新兵にかんする採決を妨げるために、議会で議事妨害の戦術を使うことであり、その承認とだき合わせに、若干の譲歩をかちとることができた。当時ハンガリーでは、小ブルジョアや一般大衆も、共同軍隊に代表されるハプスブルク家の専制政治とドイツ人の支配をきらっていたから、議会の指導者たちは、皇帝と国王の軍隊に反対する際、これらの人々の支持を獲得することができ、こうした民族的反対は、政治的・戦術的に大きな機能を果たすことになった⁵¹⁾。

こうして1888年以後、軍隊にかんする法案が論議にのぼる場合、ハンガリー人が彼らの要求をうち出すことは、一つのパターンとなってしまった⁵²⁾。軍隊問題にかんするハンガリーの要求は、二点に要約することができる。第一に、指導的な政治的サークルおよび大衆の多数は、ハンガリーの Honvéd 部隊を強化することによって、絶対主義的支配のもとにある共同軍隊への依存から逃れることを希望した。第二に、ハンガリー人は共同軍隊に終始反対し、ハンガリー人部隊のなかに指揮語としてマジャール語を導入するとともに、民族的な記章の着用を要求し、また、皇帝と国王の軍隊のなかで、ハンガリー人の部隊が他のすべての部隊から切り離さるべきことを主張した。これらの要求が、具体的な政治過程でどの程度まで実現されたか、そこにはどのような限界があったかを、以下検討することにしよう。

6. 軍隊問題とハンガリーの政治的危機

まず1888年、わずかばかり共同軍隊を拡張しようとする法案が提出されると、ブダペシュト議会ではこれをめぐって激しい論戦が展開され、首相のカールマーン＝ティサ Kálmán Tisza がウィーンからいくつかの重要な譲歩を獲得したのち、この法案はようやく可決された。その結果、マジャール人の士官候補者に対する言語上の必要条件は縮小され、さらに、共同軍隊の名前が“k. k. Armee”から“k. u. k. Armee”に変えられたが⁵³⁾、とりわけ後者は重要な意味をもっていた。

接続詞の und にかんする争いは、まことに象徴的なものであった。ウィーンでは、この種のハンガリー人の要求は、共同軍隊を二つの別個の軍隊組織に分けようとする漸進的計画の一部をなすものと考えられた。そのため、最高司令部と皇帝は、それに続く主要な争点である指揮語の問題では、譲歩しない決意をかためていた。しかし現在の時点からみれば、この争点が実際にそれほど大きな重要性をもっていたかどうかは、疑わしく思われる。軍隊の指揮語は約80の訓練上の慣用句から成り、大部分はそらで覚えられるものだ

51) Hanák, op. cit., p. 298.

52) Rothenberg, op. cit., p. 80.

53) William A. Jenks, *Austria under the Iron Ring, 1879-1893*, Charlottesville, Va. 1965, p. 245 f.

ったからである。しかし、軍隊の司令部にとっては、指揮語は共同軍隊の言語上の単一性を保証するものと思われたから、彼らは、次のような議論を用いて、マジャール語を指揮語として導入しようとするハンガリー人の要求を打ちかえそうとした。それは、ハンガリーで徴集された連隊のうち、純粋のマジャール人連隊は5つにすぎず、37は混成連隊であり、しかもそれらのうち、過半数の兵士がマジャール語を話す連隊は、わずか16にすぎない、というものであった⁵⁴⁾。しかしこの議論は、急進的なマジャール人の民族主義者たちにはほとんど感銘をあたえず、むしろそれは、指揮語を変えることによって「マジャール化」をいっそう促進しようとする彼らの気持を、さらにかき立てたのであった。

1889年1月ティサ政府の提出した軍隊法案は、二つの条項について民族的反対派の攻撃をうけ⁵⁵⁾、街頭デモに支持された議会での彼らの怒号は、悪意に充ちたものであった。そこでティサは職務にいや気がさし、1890年3月辞任した。

続いて1903年のはじめに、共同陸軍大臣が、年々の新兵数を控え目にふやすことを提案したとき、ハンガリーの急進派は、ふたたび彼らの民族主義的諸要求を繰り返した。当時は人口の急速な増加があったので、この際提案された新兵の増員は、不合理なものではなく、チェコ議員の一部さえそれを支持したために、ウィーンの議会は大した苦労もなく通過した。しかしブダペシュトでは、反対派が独立党のまわりに結集して連合をつくり、少なくとも理論的には1849年の原則に立って、賛成の代価として、マジャール語を指揮語として導入することを要求した。政権の座にあった自由党のセール Kálmán Széll 内閣は、混乱に投げこまれて辞任した。しかしフランツ＝ヨーゼフ帝は、さしあたり断固たる立場をとり続けるようにみえた。彼は先のクロアチア総督 ban カーロイ＝クレーエン＝ヘーデルヴァーリ Károly Khuen-Héderváry 伯を首相に任命し、1903年9月16日、機動演習の間に有名なフロピィ Chlopy の軍隊命令を發布して、「自分は現在の軍隊の構成をしっかりと守らなくてはならないし、また守るつもりである」と言明した⁵⁶⁾。しかし皇帝の決意はまもなく動揺し、数日中に彼は、新ハンガリー首相に送った書面の注釈で、その命令の衝撃をやわらげる一方、自由党指導者イシュトヴァーン＝ティサ István Tisza を長とする九人委員会と交渉をはじめ、さらにいくつかの譲歩を行なった。その結果、ハンガリー語は高等軍学校で一段と優位を与えられ、Honvéd の陸軍士官学校の卒業生は、共同軍隊で士官に任命されることが可能になり、またマジャール語は「連隊語」、すなわち、ハンガリーのすべての連隊で——軍隊のわずか20%しかマジャール語を話さないような連隊でも——日常のきまった命令を与える際に使われる言葉であることが、承認された。しかしフランツ＝ヨーゼフは、他方で指揮語としてのドイツ語を頑強に固守したし、またこの時には、Honvéd には砲兵部隊はまったく与えられなかった。

これらの譲歩を取りつけたうえで、ティサは1903年11月、ハンガリー首相に任命され

54) Rothenberg, op. cit., 81., なお, A. W. Hickmann, Die Nationalitätenverhältnisse im Mannschaftsstande der k. u. k. gemeinsamen Armee, Wien 1911 参照。

55) その一つは、共同軍隊に供給する新兵数をコントロールするハンガリー議会の権限を弱めるおそれがあると考えられた条項であり、他の一つは“一年志願の予備士官”に、失敗した場合もう一年勤務するという条件で、一年の終わりにドイツ語での試験にパスする義務を課する、という条項であった。Macartney, The Habsburg Empire, p. 698 参照。

56) Tapié, op. cit., p. 343.

た。しかしこれらの譲歩も、急進主義者たちからみれば十分なものではなく、1905年に、彼らはふたたび自由党政府を辞任させた。ハンガリーは相変わらず危機の状態にあり、革命的な激情の波がこの国をつつむなかで、効果的な政治はほとんど行なわれず、税金も集められなければ、新兵の徴集も行なわれなかった。こうした状況のもとで、フランツ＝ヨーゼフは、自己の信任するマジャール人の老将軍ゲーザ＝フェイェールヴァーリ＝フォン＝コミオース＝ケレステス Géza Fejérváry von Komiós-Keresztes を首相に任命して、議会に立脚しない内閣を組織させるとともに、急進的な普通選挙法をハンガリーに導入するそぶりを示した。一方ウィーンでは、参謀本部が「U作戦」の計画——ハンガリー Ungarn に武力干渉を行なうための作戦計画——を準備したが、しかしこの非常手段は必要にならなかった。ブダペシュトの議事妨害が続いたとき、皇帝は Honvéd の将軍アレクサンダー＝フォン＝ニイリ Alexander von Nyiri に全権を委任し、1906年のはじめに、Honvéd の歩兵大隊が強制的に議会を解散させた。このきびしい危機に際して、Honvéd がなお王の命令に従ったことは、注目に値する⁵⁷⁾。

反対派の連合は、内乱をあえてする勇氣はなかった。彼らは、こうした情勢の変化にあって落ち着きを取りもどし、1906年の選挙ではなお圧倒的勝利を収めたけれども、妥協的解決を受け入れる方向に向かった。すなわち、軍隊の統一の侵害を含まないいくらかの譲歩と引きかえに、連合のメンバーは、アウスグライヒを支持するヴェカーレ Wekerle 内閣に加わったのである。その結果、共同軍隊のハンガリー人士官は、ハンガリー連隊での服務を選択することを許され、また、高等陸軍参謀学校に通うためのドイツ語の必要条件は緩和された。こうして皇帝は、若干の困難を伴ったとはいえ、ハンガリーによって提出された直接の脅威を取り除くことに成功したのである。

しかしその後もなお、ハンガリー人の要求とこれに対する譲歩の容認というパターンは続いた。1910年に自由党はふたたび政権につき、1912年には軍隊法案が承認されたが、それは、Honvéd に完全な砲兵部隊を与えるという代価を払って獲得されたものであり、その場合にも、首相のティサは、極端な威圧に訴えてかろうじて法案の通過を確保することができたのであった。

以上の経過を回顧しつつ若干の所見を述べよう。まず Honvéd についてみれば、ハンガリー人は、Honvéd の増大に著しく成功した。たしかに彼らは、Honvéd に対しては、士官団を選ぶ際にも、またその政策を決定する際にもかなりの影響力をもつことができたし、1906年以降、Honvéd は本質的にはほとんどあらゆる点で国民的軍隊の性格をおびたといつてよい。しかしそれにしても、ハンガリー人がこれらの部隊に及ぼした影響力は、けっして無制限ではなく、そのうえ、Honvéd にかんするすべての最終決定は、君主の手に留保されていた。また実際にも、予想されたような極端な結果は、何一つおこらなかった。第一次大戦の間にも、新しいハンガリーの国民的軍隊は相変わらず忠誠であったし、すべての前線でりっぱに戦ったのである。

共同軍隊についていえば、これはハンガリー人にとって、二重主義体制の唯一の弱点であったから、急進民族主義者は強硬な主張を続け、特に1888、1903、1905年には重大な

57) Sosnosky, Die Politik im Habsburgerreiche, Bd. II, S. 195-197.; Rothenberg, op. cit., p. 82.

政治的危機を招いた。そして彼らは、使用可能なあらゆる手段によって、かなりの譲歩をウィーンからかちとることができた。しかしそれにもかかわらず、彼らの獲得した譲歩には限度があり、根本的な要求を達成することはできなかった。皇帝とハンガリー民族主義者の間の重大な衝突は、一般にはぎりぎりのところで、——たとえその解決が政治的妥協の形をとったにしても、明白な権力の使用を通じて——解決されたのであったが、しかしそれにしても、ハンガリーの民族主義者が最後に妥協の道を選んだことは、ハンガリーの弱みを意味するものにほかならなかった。1905年の政治的危機に皇帝が普通選挙法の導入をもっておびやかしたとき、それは、ハンガリーにおけるマジャール人の他民族に対する優位と、マジャール人地主貴族の下層階級に対する優位を終わらせることは明白であったから、議会の反対派はついに軟化して、オーストリアとのつながりを断ち軍隊をマジャール化しようとする要求を、放棄せざるをえなかったのである。

それとともに、共同軍隊がハンガリーにとって有意義であった側面も、みのがすことはできない。軍隊は、抑圧された大衆や従属諸民族や外敵の軍隊に対して、ハンガリーの支配階級の利益を守ってくれた。最も反ドイツ人的なハンガリーの地主でも、自分の土地の貧しいハンガリー農民のストライキや反乱を打砕くために——たとえ帝国軍隊がドイツ人に指揮されて行進してくるにしても——帝国軍隊の助けをもとめるドイツ語の電報をうつことをためらわなかった⁵⁸⁾。さらに、南東ヨーロッパでの国際的対立が次第にきびくなるにつれて、ハンガリーの政治指導者たちは、それだけいっそう、皇帝と国王の強力な軍隊の必要を知るようになった。これが彼らを、そのはげしい主張にもかかわらず、ぎりぎりのところで屈伏させた一つの原因であったことは、否定できない。

以上みたように、軍隊問題では、結局ハンガリーは、王朝および帝国の最高支配集団への依存を脱することができなかった。この依存関係は、帝国両半部の間に存在した原則上の平等をそこない、ハンガリーの支配階級の力を制限し、帝国内でヘゲモニーを握ろうとする彼らのさらに進んだ要求を、おぼつかないものにした。ハンガリーの政治指導者たちは、防衛のために軍隊にたよる必要をつよく感ずれば感ずるほど、ハプスブルク帝国内での自己の立場の弱さをますます強く感ぜざるをえなかった⁵⁹⁾。こうして、軍事上の問題にかんするかぎり、全帝国の利益がハンガリーの国民的利益および憲法上の主権をひどくそこなうことになったが、このような従属は、ほかならぬ「ハンガリー国家の観念」を実現するために支払われた代償だったのである。

7. 20世紀初頭の軍隊と民族問題

国民的軍隊をもとめるハンガリー人の闘争は、例によって、二重帝国内の諸民族にも大きな反響を及ぼした。この闘争は、一般的な「マジャール化」計画の一つの現われであり、「マジャール化」計画の強化は、当然のことながら、20世紀の最初の10年間に、聖シュテファン王の王冠の土地に住む他の諸民族の間に、国外に支持と協力をもとめる気持を

58) Hanák, op. cit., p. 297.

59) このことは、ハンガリーのミドルクラスが軍人という職業にあこがれをもちながら、それに従事する気持になれなかったことの原因でもあり、民衆の大多数にもわるい影響を及ぼした、といわれている。Hanák, op. cit., p. 298.

かき立てていった。従来王室への忠誠で評判の高かったクロアチア人は、1905年以後、次第に強くベオグラードに目を向けるようになったし、また、1912-13年のバルカン戦争におけるルーマニアの成功は、トランシルヴァニアで活発な「民族統一主義」の精神を生み出した。同時に、ハンガリー人のはげしい主張はチェコ人の民族的念願を活気づけ、彼らは、「国家の権利」Staatsrecht を獲得しようとする決意を、一段と強めた。軍隊についていえば、20世紀の最初の10年間に、ペーメンではかなりの反軍的宣伝が行なわれ、1905-6年の恒例的な予備役点呼の際、チェコ人の予備兵はドイツ語で答えることを拒否し、公式の“Hier”の代わりにチェコ語の“Zde”を使用した。そのため、いくつかの軍法会議が開かれ、ウィーンの議会では、大臣にきびしい質問が行なわれたほどであった。1912-13年のバルカンの危機の間に、事情はさらに悪化し、相当数のチェコ人予備兵は召集の通知に注意を払わず、またチェコ人の部隊は、民族主義的な街頭デモの取締りをいやがるのが判明した⁶⁰⁾。1912年にセルビアの前線に輸送された部隊でおこったチェコ人の反抗も、局部的なものではあったが、オーストリアの政策に対する彼らの拒否的態度を示したものとして注目される⁶¹⁾。

このような事態の発展は、オーストリア＝ハンガリー帝国の最高司令部を困惑させた。1906年に参謀総長になったコンラート＝フォン＝ヘッツェンドルフ Cowrad von Hötzendorf は、はやくもその在職中に、軍隊を危険にさらす反軍的扇動に対する強硬な処置を主張していたが、1912年再度参謀総長の任についたとき、軍隊をその出身地域から移しかえるという古くからの便法によって、増大しつつある民族的不満の問題を処理しようと計画し⁶²⁾、実際、1914年の秋に大規模な移動が予定されたのであった⁶³⁾。

ともあれ、帝国内の民族的不満は、軍隊をひどくそこなう結果になった。少なくともいくらかはそのために、軍部は必要とした予算上の支持を得ることができなかった。全ヨーロッパが熱狂的に軍備を進めつつあった時期に、オーストリア＝ハンガリー帝国の軍事予算は、主要な強国のうち最低にとどまっていた。帝国の人口は、1870-1914年の間に40%以上増えたが、軍隊の常置人員は、わずか12%しか増加していなかった。1914年には、訓練を受けた予備兵と装備の必要が痛感されたのに、それらの不足が目立っていた⁶⁴⁾。これらの点をふまえて、ローゼンバーク教授は、「二重王国は経済上・工業上の資源をもつ

60) Kiszling, “Das Nationalitätenproblem in Habsburgs Wehrmacht,” S. 88.

61) Jan Havránek, “The Development of Czech Nationalism,” Austrian History Yearbook, Vol. III, pt. 2, 1967, p. 259.

62) 1882年に、動員の際の遅滞をへらすために、連隊は普通、その兵士たちが徴募された王国の地域に配置されるという重要な変化が、軍隊組織に導入されていた。しかし士官はしばしば、彼自身の民族性とはちがう民族の連隊に配置されていた。Macartney, op. cit. p. 695.

63) ibid. しかしドイツの軍部は、二重帝国の軍隊について、コンラートのような憂慮をもつことはなく、そこにはいっそう楽観的な現状判断が支配していた。1913年に、あるドイツの参謀はその覚書のなかで、いまなおハプスブルク帝国の士官団は、「その軍隊が数カ国語を話す性格をもっているのを埋め合わせ最大の、そしてこの時点では実に有効な勢力をなしている」と言明しており、また兵士にかんしては、彼らはよく訓練されており、自発的であり、愛国的であり、大部分は皇帝に忠誠であり、いまだ反軍国主義的扇動の影響を受けていない」と判断しているのは、注目に値する。ファークツ「軍国主義の歴史」II. 215-216 ページ。

64) Regele によれば、「議会における政治的な議事妨害の十年間は、王国に、有効な軍備拡張のための時を失わせてしまっていた」。Regele, Feldmarschall Conrad, S. 188.

てはいたが、民族的統一を欠き、また、近代的な一大軍事国家になろうとする意図を欠いていた」⁶⁵⁾と語っている。

第一次大戦の勃発は、二重帝国の軍隊に重大な試練をもたらした。もっとも、最初の動員は滞りなく進んで、敵側を驚かしたが、オーストリア＝ハンガリーの当局もこれには一驚しながら、安堵の胸をなでおろした。ベーメンのチェコ人やヴォイヴォディナのセルビア人の間にも、意外なほど王朝的忠誠心の蓄積があったことが、判明したのである。しかし、そこにはかなりの弱点が含まれていた。最初から民族的離反のおそれがあったために、いくつかの民族部隊を特殊な戦線に展開することは、控えねばならず、一般にどの戦闘にもあてることができたのは、ドイツ人、マジャール人、ボスニア人の連隊だけであった、といわれている⁶⁶⁾。特に、最初の熱狂が次第に減退し、軍隊が最初の重大な敗北をこうむったのちには、これらの三者以外の部隊の戦闘価値は、大きく動揺した。紛争の徴候が最初に現われたのは、ベーメンであり、そこでは、はやくも1914年9月に部隊が前線に出発した際、それに伴っていくつかの反戦デモが行なわれた。続いて1915年9月には、ロシア戦線で、プラハ出身の第28歩兵隊に大量の脱走がおこって、当局に重大な衝撃を与えた⁶⁷⁾。

戦争の長期化とともに、他の軍団の間にも、敗北主義と不満のきざしが現われてきた。とりわけ、1916年に老帝フランツ＝ヨーゼフが逝去したのちには、戦争の潮流は明らかに王国に不利な方向に向かい、それに伴って、チェコ人のみならず、セルビア人、ルテニア人、スロヴェニア人、クロアチア人の編隊をも巻きこんだ事件の数が、ふえていった。戦争が継続するにつれて各種の軍政機関が次第に権力を増し、これらの機関が王国のスラヴ系諸民族をひどく取り扱ったことも、事態の悪化を促進した⁶⁸⁾。1916-17年の冬までに南スラヴ人の編隊はバルカン戦線の戦闘ではもはや頼りにならなくなっていたし、またクロアチア人の部隊は、一般にあてにならないものと考えられていた。しかしそれにしても、この時までドイツ人以外のすべての軍隊が忠誠心を失ってしまったと考えるのは、行きすぎである。軍隊の士気はなお個々の指揮官の人柄によるところが多く、彼らはしばしば自己の部隊の忠誠を維持することができた。たとえば、1917年に、第9歩兵連隊は、主としてチェコ人であり、不満の広がっていた地方の出身であったにもかかわらず、カポレットの戦いで大きな手柄を立てて、勇名をとどろかせている⁶⁹⁾。

1918年の春、オーストリア＝ハンガリーの軍隊はなおその戦線を保持していたけれども、後背地では、すでに分解が急速に進みつつあった。戦闘参加の拒否や徹底的な脱走が、ひんぱんにおこっていた。若干の地方では、“green cadres”，すなわち、小山で自活している武装した脱走兵たちが、交通路を脅かしたり武装した抵抗運動の中核になったりしていた⁷⁰⁾。1918年の秋までに、軍隊の力はすでにつきており、諸民族の分離＝独立運動は急速に進んでいた。10月17日にカール帝が「朕の忠良な国民に与える」と題する宣

65) Rothenberg, op. cit., p. 84.

66) Rothenberg, op. cit., p. 85.

67) Zeman, *The Break-up of the Habsburg Empire*, pp. 51-56.

68) Zeman, op. cit., p. 251.

69) Cyril Falls, *The Battle of Caporetto*, Philadelphia 1966, p. 137.

70) Zeman, op. cit., p. 162 f.

言を發して、オーストリアを「自由な諸民族の連合」にしようとしたのは、すでに存在している事態を認めたものにすぎなかったのである。

しかし全体的な見地からすれば、4年半にわたるはげしい戦闘期間中のオーストリア＝ハンガリー軍隊の活動は、むしろ賞賛に値するものであったといえよう。それは、長期戦の圧迫に耐えるうえで予想されなかったほどの力を示したが、しかし自国の敗北後まで生きのびることはできなかった。両大戦間期の継承諸国の歴史家たちは、オーストリア＝ハンガリー軍隊内部の民族的な抵抗を力説する傾向があったが、その点だけを一面的に強調することは、正確ではない。最近イギリスのジーマン教授は、「1918年の夏までは、帝国軍隊は概して相変わらず有効な道具であった。……そして、戦争の4年間におけるオーストリア＝ハンガリー軍隊の貸借対照表は、この命題を支持している」⁷¹⁾と述べているが、基本的には、この評価が正しいと思われる。

む す び

最後に、全体について若干の付言を行なって、結論にかえよう。ハプスブルク帝国の軍隊は、何よりもまずその歴史的経験の所産であって、この国の発展、この国の複数主義的な構成、そのユニークな国家概念などがすべて、軍隊のなかに反映していた。18世紀初頭以来、ハプスブルク家の君主たちは、いっそう集権化された国家組織を実現する方向に進みつつあったことは事実であるが、しかしこの目標は断続的にまた時には不熱心に追求されたために、全面的に実現されることはなかった。そこには、分立主義的・民族的な諸要素がかなりの力で生き残っており、19世紀後半になると、これらの要素はナショナリズムの高揚のなかであらたな勢いを得たのであった。軍隊は、ハプスブルク帝国を一体化してゆく過程で一つの有力な要因として役立ち、1867年のアウスグライヒ以後も、王国の両半部の双方で機能する数少ない制度の一つとして生き残っていたが、それは政治的状況から切り離されたものにはならなかったし、政治的権力を越えた立場にも達しなかった。ハプスブルク帝国は、けっしてプロイセン的な意味での軍事国家にはならなかった。あるいは、テイラー教授の言葉を借りるならば、「ハプスブルク家の『軍事国家』は、ヨーロッパにおいて、軍国化されることの最も少なかった国家であった」⁷²⁾。それゆえ、この国の軍隊はつねに、国家のなかに存在した支配的な諸傾向を反映したし、民族問題は、それが軍隊の外部で解決されえなかったと同じ程度に、軍隊の内部でも解決されえなかったのである。

71) Zeman, op. cit., p. 39.

72) A. J. P. Taylor, *The Habsburg Monarchy 1815-1918*, New York 1965, p. 229.

The Habsburg Army and the nationality problems

Toshitaka YADA

Historians have generally agreed that the Habsburg army constituted one of the main pillars of the multinational empire and that it was largely unaffected by the nationality problem. This article intends to inspect, on the basis of the historical facts, whether this view can be accepted or not.

In short, throughout the period from 1815 to 1918, the nationality problem was constantly present in the army. In 1848–49, it actually divided the army against itself. At other times it decayed the loyalty of some troops, and often influenced political, administrative, strategic and tactical decisions. After 1867 the status of the Hungarian forces within the Dual Monarchy became one of the most complicated and crucial problems of the empire. Though the army certainly served as an important factor in the integrating process, and after 1867 remained as one of the few institutions functioning in both parts of the monarchy, particularistic national elements survived and gained renewed vigour in the latter part of the 19th century with the rise of nationalism. Since the Habsburg empire never became a militarised state in the Prussian sense, the army never became separate and independent from the political conditions and always reflected the prevailing trends existing in the state itself. Therefore the nationality problem could not be solved within army, so far it could not be solved outside.